

第6章 梯川中流域左岸における古代集落の動向について －軽海西芳寺・荒木田遺跡の調査から－

1. はじめに

この章は、軽海西芳寺遺跡と荒木田遺跡を中心に梯川中流域左岸の古代集落の動向を若干考えてみようというものである。ここで検討する主な項目は集落の時期、建物の方位・規模、立地等である。それぞれの遺跡から出土した遺物あるいは遺構については十分な検討は行っていない。また、梯川中流域左岸と限定したように、筆者の力量不足と広範囲を検討するよりは限られた範囲内の動向を探ることを考えた。

2. 荒木田遺跡

荒木田遺跡は軽海西芳寺遺跡の北約400mに位置し、梯川の自然堤防上に立地している。県埋文センターと小松市教育委員会で調査が行われている。県埋文センターの調査は道路の拡張部分の調査であり掘立柱建物等の遺構を十分に検出しているとは言いが、軽海西芳寺遺跡を含めて梯川までの約500mという長い調査区であり、その結果両遺跡の立地と動向がよくわかるという好条件も生み出したといえる。

荒木田遺跡は弥生時代から中世までの複合遺跡であり、古代では8世紀後半～9世紀前半を中心としている。県埋文センターの調査では建物跡は3棟程度しか検出されていないが、小松市教委の調査では数十棟の建物跡が検出されている。市教委の調査は未報告であるので、県調査分について述べると、検出された3棟の掘立柱建物はいずれも調査区外に延びており、その規模を明らかにすることは出来ない。建物の方位はいずれも西偏する。掘立柱建物以外の遺構では、水場遺構（S X 1 3）が注目される。水場遺構は湧水を利用したもので、自然堤防の傾斜面に立地している。この水場遺構からは8世紀第2四半期から9世紀後半頃の土器が出土しており、そのうち約130点の墨書土器が確認されている。その他貝類、木製品等の多数の遺物が出土している。墨書土器の中には「兎橋」と読めるものもあり、兎橋郷の一部であった可能性が考えられている。この水場遺構は飲料水としての日常的な使用だけでなく、斎串・人形などが出土している事も含めて非日常的な使用、いわゆる祓いの儀式にも使用されていたと考えられている。そしてこの水場遺構は「村落結合のあかしであり共同体のアイデンティティー確認の場であった」とされている。荒木田遺跡で再び集落が形成されるのは12世紀のことである。

3. 軽海西芳寺遺跡

軽海西芳寺遺跡は5次の調査が行われており、縄文時代から中世の複合遺跡であることが明らかになっている。縄文時代の遺跡は丘陵端部に位置しており、古代の軽海西芳寺遺跡とは立地が異なっている。古代は7世紀初頭から10世紀前半段階の遺構・遺物が出検されている。1・2次調査で検出されている掘立柱建物は、総柱建物5棟、側柱建物4棟が検出されている。それぞれの詳細は本報告に譲るとして、建物方位を見ると、東偏2～5度にまとまるグループと、10度以上東偏するグループ、そして1棟のみ西偏する建物がある。それらの時期は、柱穴等から良好な遺物が出土していないため、個々の建物について明らかにすることは出来ないが、東偏2～5度のグループは8世紀後半から9世紀前半、10度以上東偏するグループは8世紀後半以前、西偏するものに関しては不明である。3～5次調査では、7世紀後半から10世紀前半頃まで遺構遺物が出検されている。掘立柱建物は一部を除きすべて西偏している。1・2次調査で検出されている掘立柱建物とは明らかに建物方位が異なっている。昭和58年度調査区北端のSD01を境にして建物群が違う可

能性が高いと思われる。西偏する建物は、荒木田遺跡、漆町遺跡や、後述する佐々木ノテウラ遺跡を含めてもそれほど多くは検出されていない。ただし、佐々木遺跡では多くみられるようである。

4. 佐々木ノテウラ遺跡

県埋文センターによって昭和59年に調査されている。古代は7世紀前半から10世紀前半の遺構・遺物が検出されている。7世紀前半から8世紀前葉とされている建物群は、建物方位を14～16度東に振っている。9世紀後半～10世紀前半の建物群は7～9度西偏する。また井戸が付随している。前者は複数の建物小群が倉庫を共有しているあり方であるとしているのに対して、後者は一つの建物小群内に井戸・倉庫を持ち、自立化が進んでいる段階ととらえられている。

5. 佐々木遺跡

平成9年度に小松市教育委員会で調査された佐々木遺跡では、7世紀前半から8世紀中頃とみられている柵列で区画された建物群が調査されている。未報告であり詳細は不明だが、面積60㎡を越える大型の掘立柱建物、倉庫群、井戸、工房跡などが検出されている。その性格についてはまだ明らかにされていないが、梯川流域では古代にあまり見られない井戸を持つこと、柵に区画された中に倉庫域と居住域が明確に分かれていることなど、一般の集落とは様相が異なる。建物の方位を見ると、西偏するものがほとんどである。

6. 微地形図・調査区断面図から

荒木田遺跡・軽海西芳寺遺跡とも微高地上に立地していることがよくわかる。軽海西芳寺遺跡の立地している場所の方が、標高も高く7世紀初頭から集落が形成されていることも含み、安定した場所であったことがわかる。両遺跡の境界は、SX04付近の鞍部が考えられている。SX04は自然河道と考えられており、法仏・月影式期の土器がその肩部から大量に出土している。おそらくその時期にはかなりの水量があったと思われる。荒木田遺跡はこのSX04がほぼ埋まった8世紀中頃に集落が形成されたものと考えられる。それでも埋まった部分はかなり軟弱であったと思われる。

7. おわりに

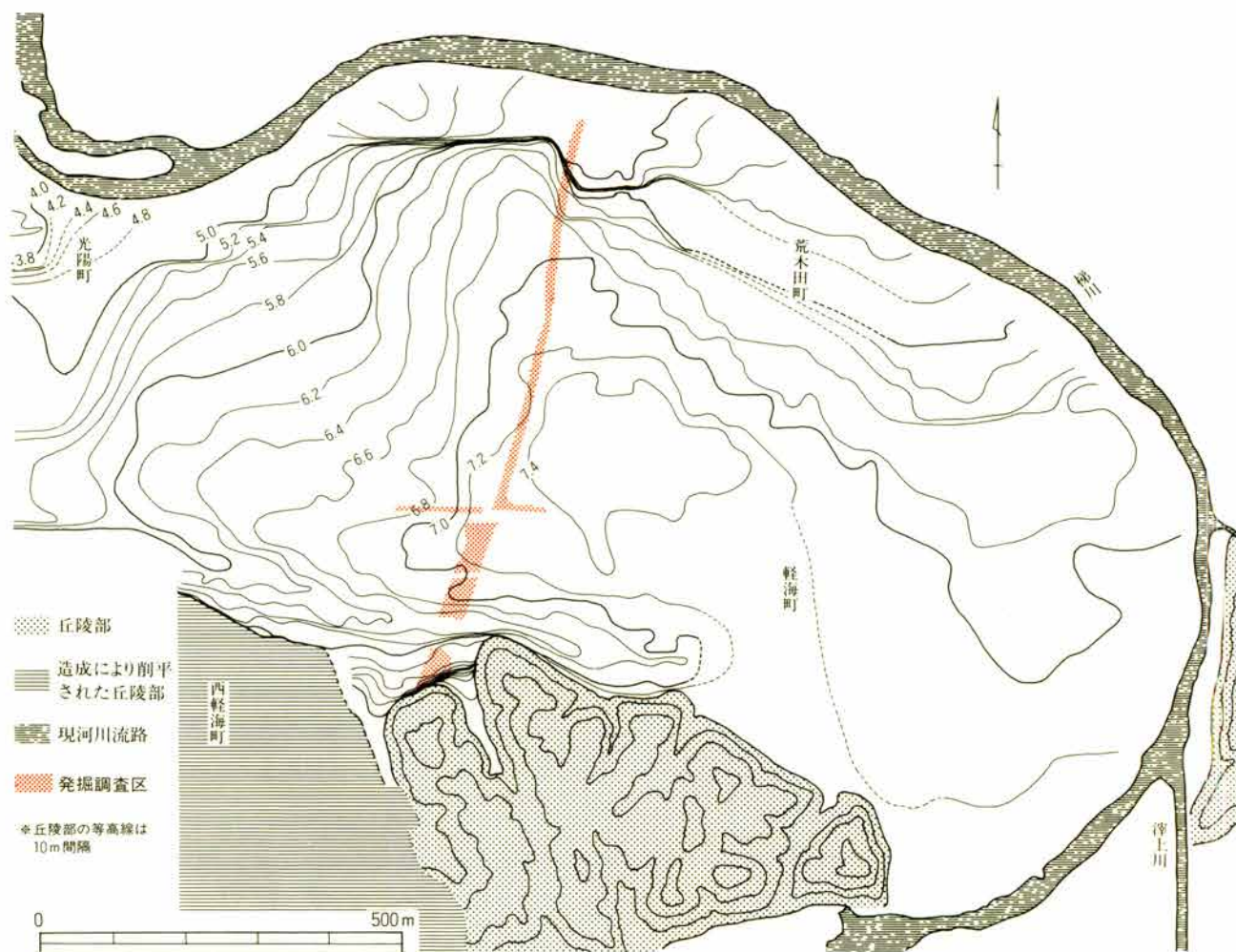
荒木田遺跡・軽海西芳寺遺跡は、その集落の形成の時期は違うが、廃絶の時期はほぼ同じで10世紀前半代であること、また佐々木ノテウラ遺跡でも同じ様な状況があることがわかった。また佐々木遺跡のような官的な集落も、7世紀後半から8世紀中頃にかけて存在していたこともわかってきた。10世紀後半以降の集落を探すと、漆町遺跡のような長期にわたって成立している集落や、集落の様相は不明だが11世紀代の遺物がまとまって出土している中海遺跡などがある。荒木田・軽海西芳寺遺跡周辺や佐々木ノテウラ遺跡周辺においては、10・11世紀代の集落は見られない。このことは国府移転論とも関連するような歴史的な事象によるものか、それとも梯川の氾濫などの自然災害などに伴うものかは現段階では判断する材料はないが、再び集落が形成されるのは12世紀を待たなければならない。

荒木田遺跡・軽海西芳寺遺跡ともに、一般集落として理解して差し支えないものと思われるが、7世紀後半にピークがあり、10世紀前半代で消えてしまうということを評価すれば、それはいわゆる律令型といわれる村落が辿った姿そのものを表しているといえるのではないだろうか。そして12世紀代に再び集落が形成されていく。これは古代にはそれほど居住域としては適さなかった場所を積極的に活用していく、自立を強め

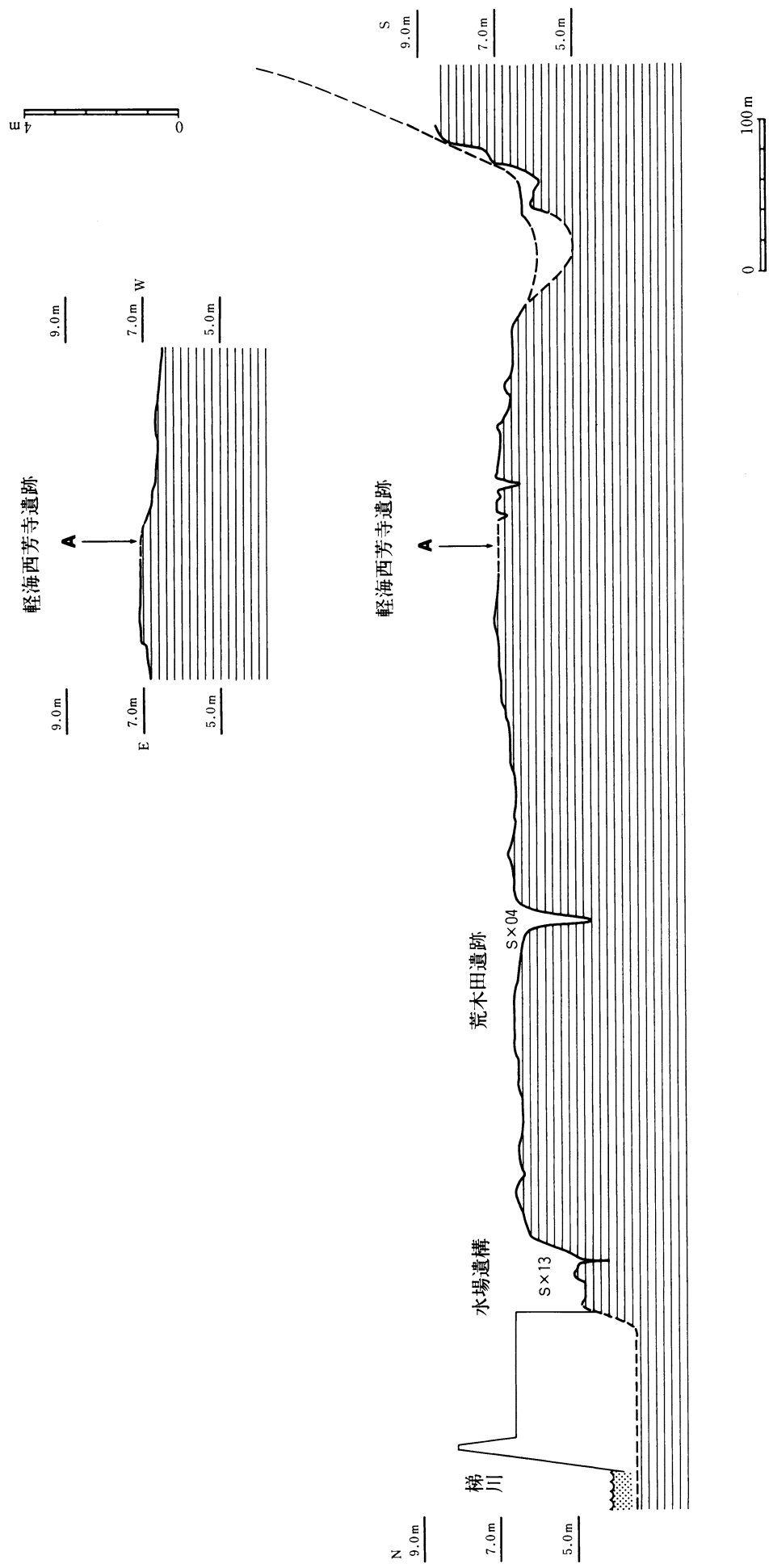
た農民の活発な活動を物語るものと考えたい。

[引用・参考文献]

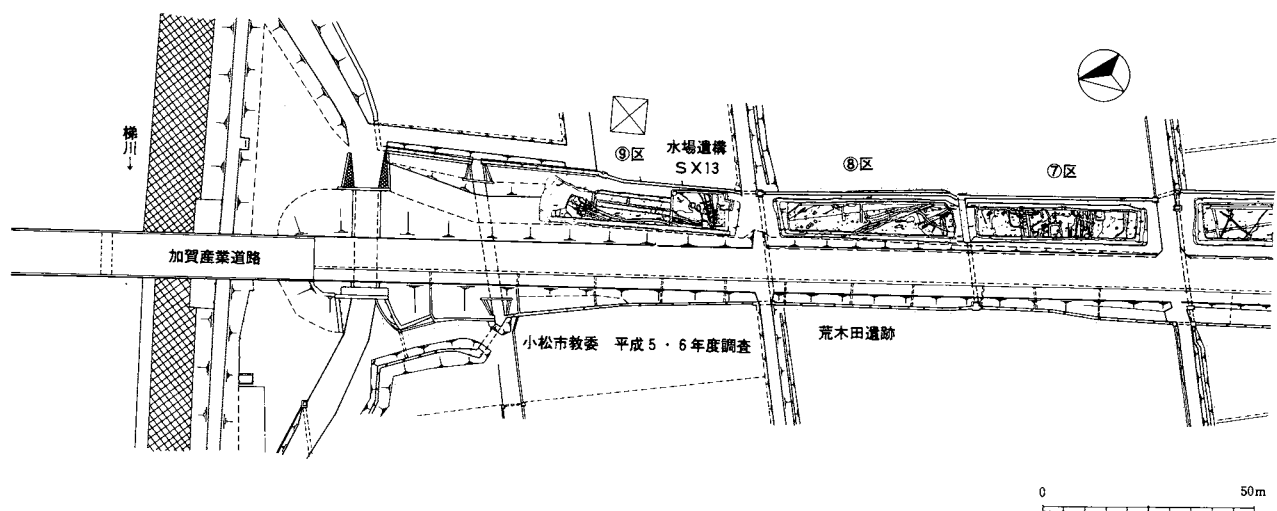
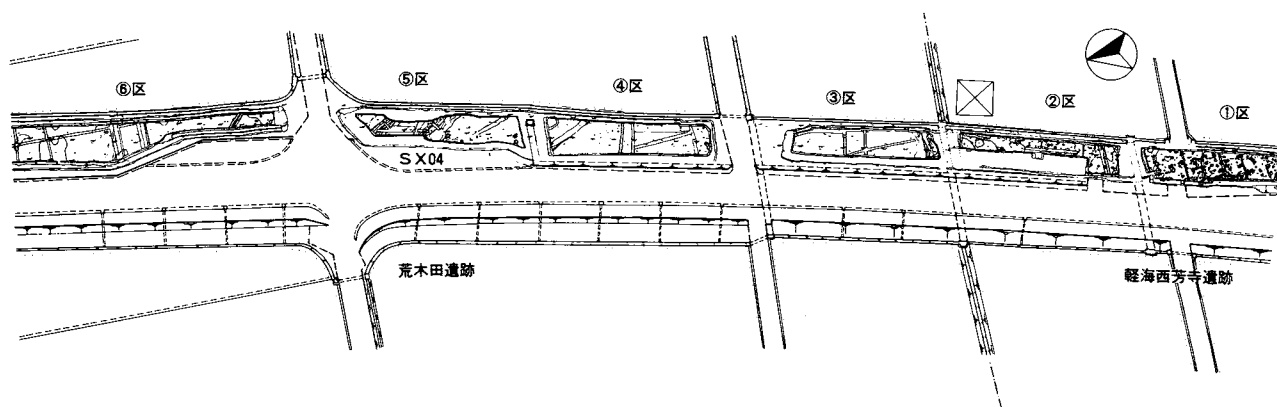
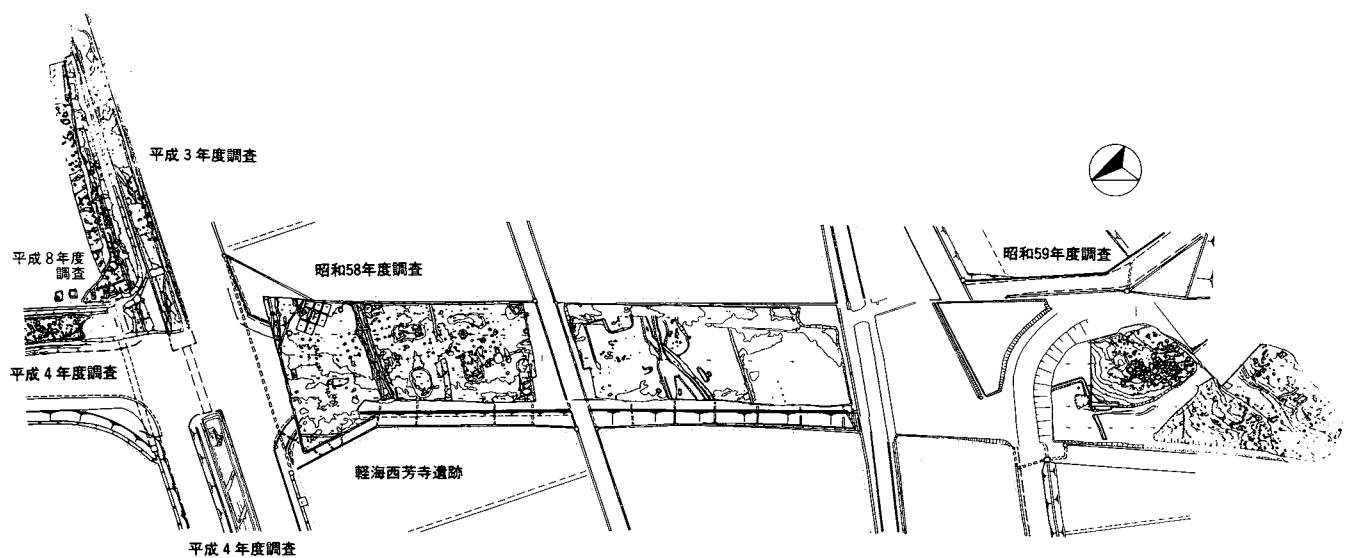
- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 『佐々木ノテウラ遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1986 『軽海遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1986 『漆町遺跡』Ⅰ
石川県立埋蔵文化財センター 1987 『小松市中海遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1988 『漆町遺跡』Ⅱ
石川県立埋蔵文化財センター 1989 『浄水寺墨書資料集』
藤田邦雄 1992 「加賀における様相 —土師器—」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』 北陸中世土器研究会
石川県立埋蔵文化財センター 1994 『軽海西芳寺遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1995 『荒木田遺跡』
北陸中世土器研究会 1995 『中世北陸の木製容器』
石川県立埋蔵文化財センター 1998 『小松市佐々木遺跡』『第55回埋蔵文化財担当市町村職員等研修会資料』



第68図 遺跡周辺の微地形図 (S = 1 / 10,000)



第69図 荒木田・軽海西芳寺遺跡調査区断面図（横軸 S = 1 / 4,000、縦軸 S = 1 / 160）



第70図 軽海西芳寺遺跡・荒木田遺跡の調査区全体図（荒木田1995より転載 一部改編）